あしたばん

2011年
（平成23年）
12月2日
金曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第十八号

ポスター完成！！

『ポスターをつくろう』講座

横なぐりの雨の中、九月二十五、二十六日に引き続き、三宅島大学では『ポスターをつくろう』講座が行われた。

民宿の女将さんを取材し、写真とキャッチコピーをもちいたポスターとして表現することで、そのひとの魅力を再発見する、というものである。

二日の昼ごろ、島民である田中耕介さんとあしたばんスタッフを含めた九名で取材が開始された。取材させていただいた民宿は、おしどり、ペンションサントモ、阿蘇、夕景（※取材順）の四つで、グループにわかれて二時間程度、お話をうかがった。

取材を終えたグループは、アカコッコ館やスタッフの滞在場所である伊豆避難施設でポスター作りをおこなう。

写真や言葉の選び方から、色、配置など、いたるところに受講者のこだわりがにじみ出るため、できあがったポスターから作成者の人となりを想像するのもポスターづくりの醍醐味だ。中にはこだわりを見せるあまり、夜おそくまでの作業にいたるグループもあるが、それもまた、楽しみのひとつである。

阿蘇の取材をおこなった笹野結衣さんは「女将さんのどんなときでも前向きでパワフルなところを表現したいと思い、このポスターをつくりました。」と、ポスターに込めたこだわりを話した。阿蘇では田中さんも取材に参加しており、島民ならではの視点と話題で会話に花が咲いた。

『ポスターをつくろう』はポスターをつくることが終わりではない。一晩かけてつくったポスターを持って、取材させていただいた民宿を訪れる。そしてつくったポスターを見せたときの女将さんの笑顔をみて、「ああ、やってよかった」と思うのだ。これからも『ポスターをつくろう』はつづく…。

（丸本　智也）

阿蘇の女将さん

制作：笹野 結衣•田中耕介•丸本 智也

『ポスターをつくろう』第一弾、第二弾で制作されたすべてのポスターは、以下URLより閲覧ができます。

http://vanotica.net/38k_u/posters.html

つくってたのしい食べておいしい

十二月三日十時～十二時アカコッコ館にて、三宅島大学講座「三宅島クッキーをつくろう！」が開かれる。

ただのクッキーではない。好きな色で好きなかたちをつくれる、「食べられる粘土」を用いての講座だ。食べられる粘土とは、カラフルで思い思いのものをつくれる粘土の一面とオーブントースターに入れると芳ばしい薫りとともに焼きあがるというクッキーの一面を併せ持った材料のことである。星やハートといったおなじみのかたちはもちろん、クリスマスツリーのような細かい装飾にこだわったクッキーもつくることができる。インパクトのある色だが、口に入れるとほどよい甘みが広がる。

粘土なんて小学生以来触っていないなんて方も多いのではないだろうか。私もそのうちのひとりだった。最初のうちは思うように生地がまとまらずイメージ通りの色をつくるのにも苦戦していたが、粘土の感触を手のひらいっぱいに満喫しているうちにわくわくした気持ちが湧きあがってきた。このなつかしくて新鮮な感覚をぜひ味わっていただきたい。「親子で参加できる講座がほしい」という声にも応え、子どもから大人までたのしめる講座を目指している。

ひとりひとり違う色とかたちに焼きあがるクッキーをいっしょにつくりませんか。島のみなさまにお会いできることを楽しみにしています。

（三島　麻里江）

授業名『三宅島クッキーをつくろう！』
一二月三日（土）
午前十時から正午まで
場所：アカコッコ館
持ち物：特になし

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島エッセイ

島びより

今回の『島びより』は、十二月一日に三宅島に初上陸した二人のメンバーによる渡航紀だ。この日、わたしたちの乗り込んだ「さるびあ号」は条件付き運航となっていたが、無事着岸することができ、冬の三宅島にたどり着くことができた。

島の洗礼

根岸　明子（慶應義塾大学　四年）

夏に島に行っていた仲間の話から、三宅島は青い海に囲まれた、気持ちのいいアイランドだと思っていた。島に着く頃には揺れが大きくなるよ、という話も、まぁ何とかなるだろうと高を括っていた。結果、船の二段ベッドの枕元に置いてあったおにぎりが上から滑り落ちてぺちゃんこになり、港に着くなり横殴りの強風と雨にもみくちゃにされ、手荒い歓迎を受けたのである。島の自然は穏やかなものではなかった。

早朝は暗くてただ右へ左へ揺さぶられてバスで来た道は、昼間に出て見ると溶岩のせいでくねっているのが分かった。至る所に黒い焦げたような岩肌の丘があり、その合間で店や住宅が普段の生活を営んでいる。噴火が起きてから、この生活を再び手に入れるまでにどれくらいの苦労があったかは計り知れないけれど、道端の公衆トイレの便座は温かかったし、避難所はきれいで快適だし、小学五年生の時にテレビの中で見た真っ白な三宅島の姿はすぐに塗り替えられた。

私の日常の世界は、自然を人間が支配している。我が家は埋め立て地に立っており、街路樹は計画的に植えられている。山は切り開いて道路が作られ、工場の煙が木を枯らす。今年三月の地震で自然の脅威を思い知らされはしたが、私たちはまたすぐに忘れてしまうだろう。今回初めて三宅島に訪れて、一番感じたのは、ここは自然が支配している島だということ。波や溶岩の前では、人間は成す術がない。お店に寄る度に見られる笑顔の裏に、常に自然と向き合って生活する島民の覚悟を垣間見た気がした。

「怖い」という気持ちがどこかにあった。

廣野　吉隆（慶應義塾大学　二年）

午前四時半すぎに島に着く。船はその大きな巨体を荒波に委ねて、私たちの足元を揺らす。天は真っ暗。島のシルエットさえ見ることはできなった。強い向かい風が私たちの上陸を妨げる。雨がどれほど強いのか、外灯の明かりを通して確認することができる。「自分が乗った船がどこに着いたのだろうか。」という恐怖感がそこにはあった。バスに乗り込み、宿へ向かう。窓の外を観察することはできない。暗闇の中、足場の悪い大地を進んでいく。見ず知らずのところを歩くというのは非常に怖いのだ。

たどり着いたのは避難所だった。避難所のなかは暖かく、極寒のなかを歩いてきた私たちを落ち着かせた。少し島のはずれにあるこの避難所はなぜだか少しだけ私たちを安心させる。それは「島らしさ」に欠けるからか。また、新しい施設は自分たちの住んでいる場所に近い存在だからか。

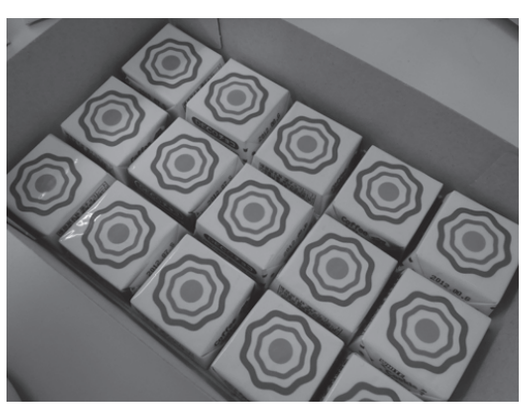
避難所が安心するなんて私たちにしか言えないことである。私たちはこの避難所を「宿」として位置づけているが、本当の意味での位置づけには「安心感」と「恐怖感」に溢れることになるのだろう。私たちに、この「恐怖感」が分かることはない。

雨の中を車で走る。あたりは溶岩で覆われた黒い大陸。焼きこげた木々。過去にあった天災の傷跡。「高濃度地区」という響きからは、福島の状況を思い出させる。しかし、そこにちゃんと人も暮らしている。彼らにとってこれが当たり前の景色なのだ。私たちは彼ら目線で島をみることはできない立派なストレンジャーであった。

三宅島のひとびとをめぐろう

三宅島に渡る前日、私たちはこの『あしたばん』を紹介する名刺サイズのカードを制作していた。これは今回の滞在で新たに行う『あしたばん放送局』プロジェクトの一環として、三宅島の方々に「来年の抱負」「来年こそ実現させたいこと」など、来る新年への思いを語っていただき、それを繋げた一連のビデオに編集しようという取り組みである。この撮影を通して『あしたばん』のことを知っていただこうという思いも含め、ビデオ公開先のURL等を掲載したカードをお渡ししている。

撮影初日の今日、十二月一日は商店をめぐり、過去記事にさせていただいた山下商店の山下広範さんや、この撮影を通しお話をした方々等ご協力いただき、少しずつ、新年への思いを集めている。



この撮影に参加いただいた方に、お礼として三宅島大学ロゴ入りのチロルチョコをプレゼントさせていただいている。島をめぐった際には、ぜひご協力いただけたらと思う。どんな方が登場されているか、楽しみにしていただきたい。

（大西　未希）

こちらのビデオは

「あしたばん編集部ブログ」

にて公開予定

http://ashitabanstaff.blogspot.com/

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。